

第5章 第12・27次調査成果のまとめ

本章では、本調査地点における各時期の主要な成果をまとめ、周辺調査地点との関係を確認する。周辺調査地点では既に、弥生時代後期～古墳時代初頭の耕作地、中世の土地区画について考察されている^{註)}ので、それらを参照しながら、本調査地点の成果がもつ意義や課題についても考えたい。

弥生時代中期～古墳時代初頭 (図132) 弥生時代中期には、調査区北西から東辺の北半にかけての範囲に河道が通っていた。この河道は弥生時代中～後期の間に急速に埋没し、地形環境は大きく変化する。河道埋没後の低位部では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭になると盛んに溝が掘削され、高まりが形成された。こうした高まりは、本調査区の北に位置する第9・11・14次調査地点では畦畔によって画された耕作地内に点在しており、耕作地にとまなうものとされている。また、弥生時代後期後半には耕作地を貫くように長さ約150m弱にもおよぶ北東-南西方向の溝が掘削されている。やや深めの椀状の掘り方を有する溝で、浅い皿状の掘り方を呈する他の溝とは異なり、灌漑水路としての役割をになったことも想定される。

本調査地点まで確認された耕作にとまなう遺構の広がり、本調査地点南半の土層と河道の範囲を勘案すると、本調査地点の高まりが耕作地の南端にあたっていると考えられる。この耕作地は、北は第25次調査地点まで広がっており、これまでの調査で確認された範囲は、少なくとも南北約100～110m、東西約140～150m、面積は約1.4～1.5ha以上となる。

古代 鹿田地区における飛鳥時代の遺構の確認は、これまで竪穴住居2棟等(第1・2次調査)、ほぼ完形の遺物が出土した溝1条(第23次調査)、わずかな水田畦畔(第9次調査)と少なく、断片的な情報しか得られていなかった。本調査地点では耕作痕とN40°～45°Eに主軸方向を揃える溝群とを確認することとなり、この時代の資料を新たに得ることができた。

中世前半 (図133) 本調査地点南西部には、溝によって区画された範囲に、掘立柱建物、多数の柱穴、木枠を内包する井戸などの遺構が密に分布しており、屋敷地にあたると評価される。南・西側の区画が未検出のため、

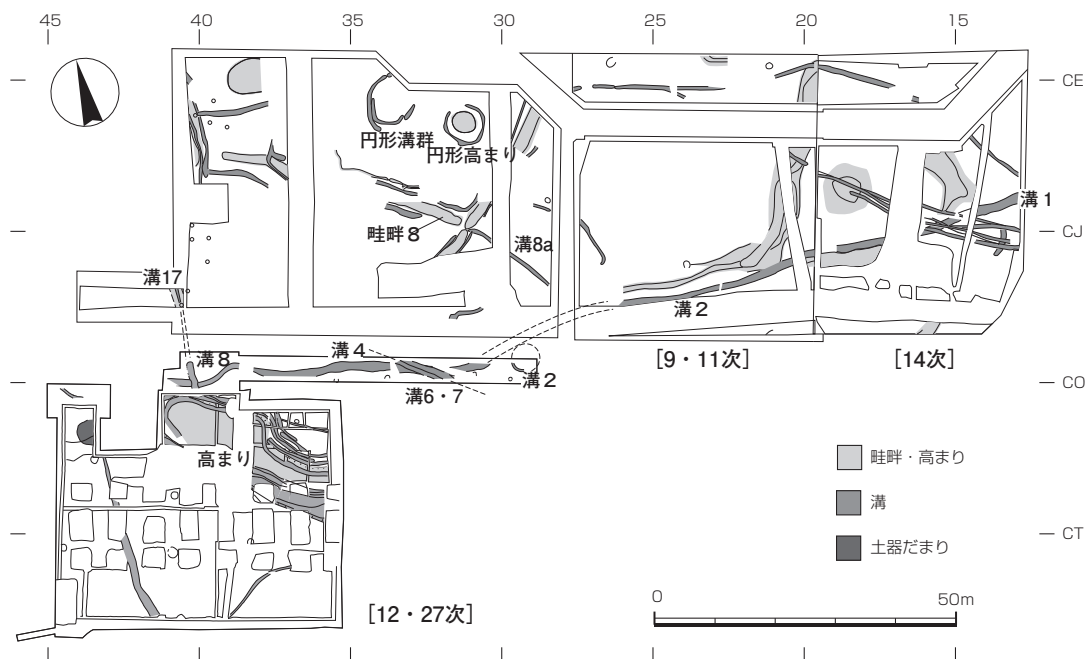


図132 鹿田地区南部における弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構 (縮尺1/1250)

第12・27次調査成果のまとめ

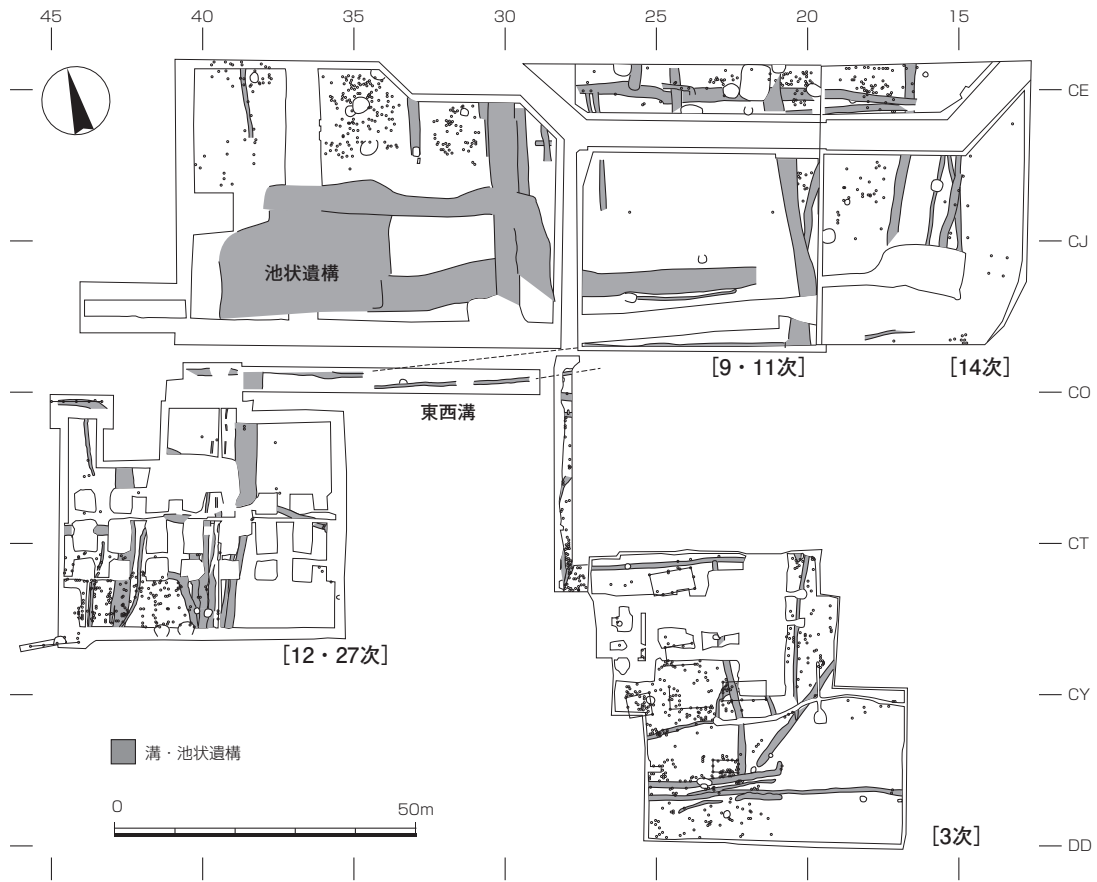


図133 鹿田地区南部における古代末～中世前半の遺構（縮尺1/1250）

屋敷地の規模は不明である。北半部では、C地点の2条の東西溝が第3・9・11調査地点で検出されている溝に接続するとみられる。その場合、この2条の溝を側溝とする長さ100m以上の道により、ほぼCOラインに沿う東西方向の区画が表示されていたと考えられる。

本調査地点の屋敷地の配置と土地区画、隣接調査区で確認された土地区画との関係については、集落の景観を復元するうえで留意される事項が確認された。一つは、本調査地点の屋敷地が、COラインに沿う東西区画線とは境を接せず、遺構密度の低い、空閑地ともいえる空間を挟んでいることである。攪乱の規模を差し引いても屋敷地と空閑地の遺構密度の差は大きい。もう一つは、東西区画線の北側では20・30ライン付近（第9・11次調査地点）、南側では38・39ライン付近（本調査地点）に主要な南北溝群が位置しており、南北区画線が東西区画線を挟んで正対していないことである。

出土遺物では、方形縦板組井戸枠に使用されていた板材の一部に建物の梁材を転用したことを示す切り欠きが認められた。切り欠きの形状から、この梁材は折置組のものと考えられる。上屋構造が折置組の場合、梁をのせる側柱は梁の両端で正対する位置にあることになる。今後の調査研究に還元される情報であり、鹿田遺跡では柱穴群から掘立柱建物を抽出・認定する際、折置組の上屋構造を念頭においた検討が求められる。（野崎）

註 山本悦世2017「鹿田遺跡における弥生時代～古墳時代初頭の水田関連遺構」pp.227-230、山本悦世・岩崎志保2017「鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造」pp.231-239、いずれも『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第32冊所収